

「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」（令和４年度採択）

事後評価結果（公表用／ソフト分野）

番号	研究名	研究代表者	評価
2022-1	道路整備による走行時間短縮便益等を把握する手法についての技術研究開発	東京大学 教授 加藤 浩徳	B
<研究の概要> 適切な道路の整備を通じた持続可能な社会を実現するため、道路事業評価の新たな手法の開発を研究目的として、時間価値や時間信頼性価値等の原単位の設定手法の開発と時間帯別の変動および道路事業による誘発交通への影響を考慮した交通量推計手法の開発を実施する研究。 <事後評価結果> ・時間信頼性に関しては、ばらつきという点での課題は残りつつ、より実務に近いところでの成果が得られている。一方で、それ以外については、まだ多くの課題が残されているものの、さらなる今後の研究の進展に期待が持てる。 ・学術的・実務的に新規性・有用性の高い成果が得られているが、研究成果を実務的に発展させるためには、他地域への展開可能性やさらなるケーススタディの実施、残された課題への対応が必要と考えられる。 ・研究内容については十分成果が見られるが、実務への適用について課題が多いと感じられる。 ・これまでに、道路の便益項目の見直しが長く行われてきたが、やっと変更のための学問背景もでき、貢献の大きい研究であると思われる。 ・研究の目的に沿った成果が得られたものと評価する。国内の実務担当者や、諸外国の研究者、政府関係者との意見交換も行い、実務適用の観点も含めた貴重な研究成果である。 ・今後の道路事業評価における時間信頼性向上便益の導入に繋がる研究成果を概ね得られたものと評価する。 このことから、研究目的はおおむね達成され、研究成果があったと評価する。 <参考意見> 1. 時間信頼性便益の運用に向けた考え方や注意点などについても知見の蓄積が必要。 2. 手法の提案だけではなく、実務者負担を最小限にするようなシステム化の仕組みなども検討の余地がある。 3. 事業評価部会において道路の事業評価手法の見直しの議論がなされているところであるが、本研究の成果（特に走行時間信頼性便益の推計手法）については、これらの見直しの議論に直結するものであり非常に有益である。本研究成果をもとに、実務適用に向けた更なる議論の発展が期待される。			

※本事後評価は、新道路技術会議の各委員が評価を行い、第 55 回新道路技術会議において審議したものである。